愛する子供達よ

江渡狄嶺

お前達個人に対しての責任だ。三つは真理に しての責任だ。 一つは人類に対しての責任だ。二つは、お前達に対して三つの責任を感じて

と同じことだ。其所には、父とお前達との間は、父も同じ人類の「所属」の一人であるべきなのだ。それ類の「所属」の一人であるのだ。それが、公・のでの子だ。然お前達はいう迄もなく、この父の子だ。然 の生る、時、父となり子となった因縁によっ利、平等の義務があるだけだ。只だ、お前達に何等の差別はない。平等の資格、平等の権 て、父はお前達の、その所属の人類の一人と して、充分な働きの出来る迄、暫くの間、そ 養育の唯一適当な資格者として、不可侵の 決して父の私しすべき「人」ではない。人、お前達は父のこういう「子」ではあった。不可避の義務を負うてあるのだ。 お前達をこういう一人として、心から



-24-

真実に心を労したところのものである。 れは父がお前達を子として与えられてから、 一人をホ 如何にしてこの尊敬すべきお前達 ントーに養い育てて行けるか、

達も、 って、父がお前達に対する心からの期待を無 父が間接にお前達を通して次代の人類に対す にしないようにして呉れ。 る父の務め、働き、責任である。ドーかお前 に対する務め、働きであるように、それは、 父が現在の生活は、直接に父が現在の人類 かかるお前達自身の尊むべき所以を知

由な発達、成長の為には、父の出来る丈け した人格」を尊重し、その独立した人格の自 ではなく、 父の「子」ではあるが、父の「所有」の一人 責任と同じように、矢張り、お前達個人は、 のだ。父は敢く迄も、 これも、 次に、お前達個人に対しての父の責任だ。 人類に対してお前達に感ずる父の 個々「独立」 お前達の、この「独立 した一人格者であ 3

> 正しく、 自由の影響、感化」は必要なことだ。れて正しく、より善くそれを生かした人の「 所為でもある。それは、実にお前達ばかりの 共に与えられた「自然のもの」を、すぐれ 正当な理由を持たない。只だ私共は、この私 ことではない。何人もこの自己の与えられ 実に対し、不正な考えでもあるし、又不正な 個人に対してばかりでなく、人類に対し、真 うてはいない。ソー 「自然のもの」を、他の何物にも拘束さる、 とも父の「人為」を以て拘束しようとは思 自然から与えられた独自の個性を少しな 一層より善く生かす為に、他のすぐ いうことは、独りお 前達 7 た

れ大きければ源は遠いという言葉もある。の負債者だということをいって居る。又、流 エマーソンという人は、最大の人は、 最大

対して、決してしようとは思わない。 自身の生命の生長を拒絶することだ。 い。私はソーした拘束をも又、お前達個人に 来る丈け、 いことだ。それを拒絶することは、自身で「自由の影響、感化」は、いくらでも望ま いう自由な、 自身で吸収するように努めるが 自然な影響、感化は出 お前達

を知って、お前達の与えられた「自然のホン社会の合成力に接した時、直ぐにその所謂知社会の合成力に接した時、直ぐにその所謂知は未だ非常に弱い。ソシテ、それは複雑せるは未だ非常に弱い。ソシテ、それは複雑せる れなければならない。ソシテ、自然のホントれ得ないところである。それは適当に保護さトーのもの」を意識して居るものの心の許さ 迄のお前達に対する、父の正しい責任だ。 格の自由とを知っての上の、 これは、お前達個人の独立な人格と、その人ーの儘に生長させられなければならない―― ことは確かだ。ダガ、お前達個人としての力さを直覚する力は、すぐれて与えられて居る いと思う。尤もお前達には、自然のホントー の影響、感化」を誤りなく撰択する迄には、 それに就い 少し 時ではあるが、然し、それをすぐれて正 、より善く生かす為めに、お前達が「自由 あらわる、のは、一番お前達位い 断の時期」を待たなくてはならな て一番大事なことは、最後に真 お前達個人としての力 或る成長の 時期

> ない。 ソなことだ。父はソンな、ウソなことを尊 筈だ。それより外にあったら、それは皆、 と一つに生かして行くという外になかるべき お前達の生涯に、少しだにも望んで居りはし られて居るもの」を「自然のホントーのもの」。 ということも、お前達がその「自然から与え して、その所属して居る人類の為めに尽くす だ。又、お前達が、人類の「所属」の一人と 然らば自然のホントーのものというのは、 のもの」を知らなければ出来な ウ

わかって居るというところよりも、モットにい。自然のホントーのところは、ドンナ人の居るという人はないだろうというより外はな って居るというものがあったら、それは自然 ット大きいものなのだ。それがスッカリわか て居らないし、他の何人もスッカリわかって ら、父も閉口するし、父もスッカリはわかっ――お前達に、若しこんなことを問われたな それをスッカリとわかって居るのだろうか。 かるものであったら、何故人間は、れはスッカリとわかるものだろうか んなに争い分れて居ることだろう。父は又、 ドーいうものだろう。人間の所謂知識で、そ カリとわかるものだろうか。 るし、 今日迄こ 若しわ

> 虚に、 居るということの為めなのだ。分裂と多様と いうことよりは、テンデにミンナ、わかって人々の分れて居るということもわからないと に信頼していいし、又何人もそれより外に本 うなことはないものだ。私共は、その「知」決して本質のホントーを知らして呉れないよ は、ホント ミンナがミンナで、ウソをつくからなのだ。 のがハッキリどわからないということよりは その争いを止めぬのか。それはホント 行けるのだ。人は何故、今日迄も争って来て のホントーなものに対する父の責任を果して ころよりもモットモット大きいという、 居る積りだ。父はそれに信頼し、それに信頼 のだ。父は、そんな人達よりは、ウソもつかい小智、小能のものか、ウソツキでしかない してのみ、ドンナ人のわかって居るというと ウソつかない良心で観た時に、自然は さを知る道がないのだ。 さが本質的にちがう。それを謙 のところもわか しのも 自然 0

に、その額の掛ってあるニュートンにしろ、 手紙を書いて居る物置小屋のスタディルー それは、 お前達も知って居るし、 父のこの

前達の「自然から与えられて居る」ホント

お前達に負うて居る父の責任だ

に成し遂げた唯一の道であるのだ。 浜の真砂の一粒」の真理探究の仕事を、

である子供達よ。 愛する子供達よ。 愛する子供達よ。 めて居る。お前達、切の最後の満足を― て、父の も敢て決してこれ等の人達に一歩も譲る積り真理に対する謙虚、良心の一道に至ては、父 本質的に生活の上に実証して来た。父は、一 はない。それと、短いながらも十幾年、そし 貧弱にして比較にも何にもなったもの の人達と、その知識の程度に於ては、固より 父は、これ等の古賢の真理探究のホントー 居る。お前達、それは正しくないだろう し、そのホントーの本質を知る上の、 信知した一つのものを兎にも角にも 一切の最後の満足を玆に正直に求 -人類に対し、お前達個 父は今、 ではな

多分その時は父はモー、墓場の彼方からだか 判断を持ち得る迄は、見守って行こうとする からお前達が「独立な一人」として、お前達の幼い成長を見守って来たし、 人類の為めに働く、長い一生の労苦の間にも、 前達の幼い成長を見守って来たし、又これ父はこうした責任の意識の上に、これ迄の お前達が「独立な一人」として、正しい 心して見て行こうとするとこ 一お前達が、 将来雄々しくも

> 居るものだ。父は、それを欲する本人、並に 教育は、それに極めて便利に、重宝に出来て め、世俗の栄誉を欲するならば、その時代の第二の問題として、只だ!~一身の安易を求 これは、ドンナ理窟で来ても、父の一歩も退 違ってある知識は、ホントーにお前達の生命 がある。か、る良心の伴わない、伴っても間本の良心に、父とドーしても相容れないものい。然し、今の教育には、その依って立つ根 しておくことは出来ないのだ。 の良心は何処迄もそれを黙視 全然阻止する力はない。 親達にソーした時代の教育を受くる権利を、 人類のホントーの幸福も、 かない確信だ。お前達のホントーの生命も、 も、人類の幸福も絶対に育ても長じもしない けなら、父も今の教育は出来る丈け利用 なことでもあるまい。単なる知識を与うる丈 とは出来ない。又、それは玆には大して必要 門的に教育のことに就いては、一つも話すこ のだ。父は、教育の専門家ではないから、 ろなのだ。父は、その為めに実にお前達の教 しても人手に委すことは出来な 只だお前達には、父 ソンナことは先づ して、 いいと許 した

楽を望まず、 栄誉を欲せず、強いて人生の苦何所の世界に、親がその子の安

番重大な良心の責任はない。それ程であるか 並にやって行きさえすれば、相当な一身の安も良心の為めだ。父もその良心の為めに世間 があろう。 この父の良心が正しいとしてやったことに間 断が出来るようになって、その判 責任は負う。お前達が将来、正しい良心の判 で、このお前達の教育の事程、 いうことをば想うて呉れるな。 ホントーの幸福、自由を顧慮してない いうことを考え合せて、父は決してお前達の ところを実際、自分でも生活して居るのだと お前達にだけでなく、現にその良心の命ずる やって居る、その苦しい心持ちと、父も亦、 この父が人情として忍び難いところを忍んで 労働の生涯に這入ったのだ。ドーかお前達も 楽も栄誉も得らる、身を捨てて、今の苦しい もいわれない心の痛みを感ずる。然し、 を考えて見れば、人一倍涙もろい父は、何と てお前達が、ボロくへの衣服を着、いそがし 闘に押しやるようなことをする無慈悲なもの 々としてその教室に学んで居るのを見、 いな子供の嬉々として学校の校庭に遊び、 父や母の労働の合間/ に教育さるること 父は最後迄、このお前達の教育に対する 東京への往返に、お前達位 父の感ずる 父の責任の中 断から若 のだと 何事 -26-

な鞭打ちでもお前達から黙って受ける。 いがあったとしたならば、 父は何時、

なって呉れるな。 8 し、ドンナことがあっても、不正な良心の為 を見捨て、 父を捨てて、この今の生活を始めた時から、 育を始めない前、 から、人類に対し背を向けるような人とは 捨て、父を鞭打つ子となってもいい、然お前達も、正しい良心の上からなら、父お前達も、正しい良心の上からなら、父 今か らではない。未だお前達 お前達の祖父に当る、父の の教

聞くし、 教育に就い わかりもしないし、 のドンナ非難の言葉よりも、数多くの欠点を 深いホントーのところを知って居るし、又そ ンナ皮相の言葉にしか過ぎない。父は、この べって居る。 色々と、 前達の教育の、 ントーにハッキリとわからなくては、この 父の最大の遺憾とするところだ。 七八分に行うことの出来ないで居るの 非難の言葉も聞く。 父の考えて居ることを色々な障害 父のこの教育に対し推賞の言葉も 善いも悪いもホントーには いわれもしないことなの 然し、

て、そのドンナ推賞の言葉よりも 実際、父の良心とその生活とを ソレハミ

来いない 出来ないものなのだ。 活の良心から離して、 い加減に考えて、おきよう・・・・父は、生活の全面を切れ切れ、バラバラに い人間なので、お前達の教育も、父の生加減に考えて、おさまって居ることの出 別々には考えることの

である。 ものを、 の知り且つ生かして居るそれよりは、すぐれり、且つ生かす「自然のホントー」さは、父意味するのではない。又固よりお前達の、知 の上に正しく徹して生かして行くということ たものでなくてはならない。要はホントーの 0) 為めに、現在、父の「自然のホントーのもの」 0 固よりそれは、父の生活と同じような外相を もの」を生かそうとする連続な労作なのだ。 にお前達を通して同じく「自然のホントーの と信ずるところのものを生かして居るところ 父の生活は、 ものなように、お前達の教育は、父が次代 一人として、 各自の「自然から与えられたもの」 父がその所属して居る人類の 前にもいった、人類の「所属」

二つの「元」がある。「生きる」ということ 居るも といっておく 人が 「生かさる、」ということである。 のは皆そーだが、 人ばかりではない、 ホントーに生きて行く上に 今これ等を凡て、 総ての生きて 人

> 正しいホントーさだ。 る愛も調正さる、。それがホントー 玆に始めて個の生くる労働も、 の良心が働かなくてはならない。この人類の 労働の元で、 類の生活 何よりも人類の一根の先験から来る 」は、この二つの十字元上にある。 後者は愛の元である。一切の生 正しき生活は、其の上に人類 ントーの正しさ。

となり、又ならなければならないのだ。の諸種の複雑な関係した人生の諸問題の考え 要は、この全一な生活を基調とし、その上で それ 父の立った所もそれだ。後は説明だ。色々 が、無相に接し、多相に拡がるとも、

な、 外ならないことなのである。 働いたり、勉強したりして居ること、 余所の子供達より直ぐわかる。御家での日常、 だかわかるまいが、 お前達に、こう固苦しくいっては何のこと 全般の知識の説明、弁証に過ぎない 何でもない。 お前達には それに

だろう。御家では、一文の余分に貯えてをる の働ける丈けの仕事を一生懸命に働いて居る れでも分け隔てなく、 余所の御家は知らないこと。 食う為めに、是非とも働か ミンナ働ける人は、 御家では、

大きくなって行くだろう。その方は、全く可愛がられてば 然し、生かさる、愛ということは、只だれは生かさる、愛ということなのだ。 というのだ。それと同時に、未だホント れでもこうして御飯を頂くに、働ける人は よっここ。、全く可愛がられてばかり、育て、全く可愛がられてばかり、育ているという。 それに誰れ 育てら も不服 い子 きる労

け甘いものを食べ、自分丈けいい振りをし、ホントーに生きて行けるものではないのだ。たてばかりで、愛し、愛さるることなくしては、でばかりで、愛し、愛さるることなくしては、 て、又生かされてあるのだ。誰れでも、働いいさん達も、お前達可愛い子供等の愛によっいさん達も、お前達可愛い子供等の愛によったとは、実は、父さん母さん、においた。とばかりをいうのではない。モット うことを知ってをるからなのだ。それは正 分丈け楽をしようとする心の人はない し、生かさる、愛ということは、 丈け外の人 n それを良心というのだ。 自分丈けそういうことをすれば は苦 しまなけ ればなら X だろ とい だこ

御家では又、この御家全体をひと これ迄の御家の内の話しと同じ

> な面倒な理窟はあるだろう。然し、ソンナ面倒な理窟は、今はドーでもい、。 只だ、この倒な理窟は、今はドーでもい、。 只だ、この倒な理窟は、今はドーでもい、。 只だ、この倒な理窟は、今はドーでもい、。 只だ、この音行く良心」に、個性を動かし頭を下げ得られる人は、ホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をホントーに徹底して生活して行ける人は尚をいいます。 ントーにエライ人達となって呉れ。 しまないでの考えなのである。其外に、色々にいさん達の血涙を流しての望み、骨身を惜誰れでもこうありたい、それが父さん母さん して行こうというわけなのである。ソシテ、 家のミンナの人達に、難儀苦労をさせないなわけで、御家が楽をする為めに、余所の 一緒に一生懸命に働き、愛し、 愛され

愛する子供達よ。

ところはあるが、詮ずるところ其処にあるの教育の基礎、根底は、未だ未だ言い足りない父の自身の生活、父のお前達に対する希望 いう良心はあっても、上っペラな言葉丈けに だ。父はそれを想うと、 しか過ぎないこういう労働はあっても、 ドーしてもー ーこう 無良

> ない、 のでない い切って手放してやることは出来ない。ないお前達の純潔な魂を、父はドーしても思ないお前達の純潔な魂を、父はドーしても思 もホントーの良心も労働も伴っ 0 ント た今の ナマケモノの遊戯にしか過ぎ 0) 世の 中の 労働も 知識や生活や ったも 愛が

それは、父の我意だろうか。果たそれは、 父が人類に対し、お前達個人に対し、真理に 対し、ホントーに正しい義務権利の遂行では ないだろうか。

うより、ドンナ権威のある「神」でも、他の現在、父の正しいホントーなとした良心に経誤ったら何時でも鞭打たれる。然し父は、 良心に従う無人格的な義務、理由を認めない なとした良心に従 0

対し、真理に対し、その正しいと信ずる父のろは、ホントーの人類に対し、お前達個人にろは、ホントーの人類に対し、お前達個人にった。とれにしても、お前達、愛する子供達よ。 愛とに生かした、父の生活とより来た一点の良心、それと、その良心をひたすらに労働と くく一春み込んでおいて、 るようなものではないのだから、その点はよ 父自身の安逸、欲望を主とした、 0 判断が ハツ とつくような時にな 他日お前達が、 雑り気のあ つお 0

粋な心を失わないで、 のことはして呉れ。 莞爾として瞑目するであろう。 にしても「よくやった」とお前達を祝福 少しも父に対する気兼ねは 養う人もなく、何処かの路頭でのたはして呉れ。ソシタラ父は、働けな しては頭を下げ得られる丈けの謙虚 類に対し、お前達自身の ホントーに正し やり遂げる丈

から脱して正 にして始めてホントーに正しい認識、智恵に 日の悪い結果の為めだ。それを知って父は、た。これも皆、今の世の中の生活、知識、教がら脱して正知に達する努力に消耗されたのから脱して正知に達する努力に消耗されたのから脱している。それ迄の大半の精力は、悪知 の悪 ち得 実際、父は人生の半ばを過ぎた三十、 してお前達に再び、この若い生命の浪費 るようなことが出来よう。それは考え い時からそのホントーの正しいとこ も恐ろしいことだ。ドー 雄々しくも父の不徹底なやり 精神的にも肉体的にも充実せる 兄より弟が優れたものに かお前達丈 四 +

大事にして呉れ。然し、父は地上の財物は達の魂の糧だ。父の精神とも思うて、ドー購い得た数千巻の書籍だけだ。これは、お その地上の財物に幾層倍も尊い贈物がある。つもお前達に与え得られぬとしても、父には が貧しい中から食を節し、衣を節して僅かに数うることが出来るものがありとすれば、父 与え得られるものに、ソーいう地上 有てるものを与えん」とい D つもない。強いて与え得られる財物 小父さんは「金銭は我れになし、我はお前達も知って居るエス様の御弟子のの地上の財物に幾層倍も尊い贈物がある 得た数千巻の書籍だけだ。これは、お前 たない。こうした貧しい父のお前達、一寸の土地も持たなければ一文の った。 我は我 上の財物は一文の金 物は一 として 我がです。 カ

ような強い 人の面をも恐れず、お前達の人生の旅路に雄る良心の宝だ。お前達は、この良心の前に何その一つは、ホントーの正しいものに対す 父の持てるその地上の財物に優っていを与えん」とい 確信の力を感ずる るに、

その二つは、 かないことは人間の恥辱だ。 労働の精神だ。粗衣粗食して ドンナに

> けるの人となれ。 は、人に頭・ を下 決して自 る 分の 衣食の生活 <

父は、多 なってこの父の贈物を受けて呉れ。父の真裸なようにお前達も真裸な、男、 お の「所有」を今、お前達愛する子供達に遣る 三つより他はない。父は、このホントーの父 父の所有というば固より富でもない。名誉で もない。知識でもない。正しく 情、これは最後にお前達に与うる父の贈物だ に対する熱愛、それが為めには不惜身命の 前達も、富に装われず、地位に飾ら 第三は愛の心だ。真理に対する熱愛、 少とも、この三つを所有して来た。 いって、 1 この 女と

宝で飾り装うて呉れ。 ソシテ、 この真裸な身を、 只だこの三つの

大声したそうだが、私も最後に、お前達に只 学の自己の教え子と別る時、馬上、手を挙げ て只だ一語がボ だ一語、『人となれ、 ヤピテンクラークが、 れをするとしよう ーイズビーアンビシャス ホントー の人となれ 0 農 科

左様なら、 愛する子供達よ。 又機会が あ

(『或る百姓の家』(大正十四年刊)より)

自由大学論

田杏村

は無いと思う。 に何等かの便益を得る事にだけ止まるもので教育とは、其れを受ける事により、実利的

我々が銘々自分を教育して、 步一歩人格

田 杏

学」として発足、その後各地に拡がる。 名をつらねている。 業年 講師には高倉テル、 自由大学運動は大正十年に「信濃自由大 昭和九年(一九三四年)四三才で死亡。 二八八 土田杏村は、本名を茂といい、 思想家、文明批評家として活躍。 九一年)に生まれ、 出隆、 恒藤恭なども 京都大学を卒 明治二四

東京都日野市六九六四の一九上木敏郎方) として出され、 再評価を行なっている。 「土田杏村とその時代」が研究誌 忘れられた思想家としての (発行所は

> ての無上の光りが輝く。此の人間の本分を益 £ 0) より理想的に生かして行く主体は、自分以外 0 育の直接の目的を達したのである 絶対に支配せられないところに、人間とし 何者でも無く、 より理想的に生きることだ。 生きるとは人間として生きることだ。 生命を長く延ばして行く事ではない 生きるという事は、我々が生物として自 自律を達して行くとすれば、 自分は自分以外の何者から 其れが即 しかし自分を ち教 分

ても、 いなる罪悪だ。 他律であってはならない。よし教育者であっ他律であってはならない。よし教育者であった人格の 他の教 此れを他人に強制することは人類の大 育者 から教育を受ける事も、 他の教育者から受ける教育

とが即ち自己教育である。

して生きることであり、人間として生きるこ

即ち自己教育である。

々はっきりさせ、

人間として生きることは、

自己教育が即ち人間と

育の其れでなければならぬものだ。 は無く、 基礎にも、 教育の内容に就ての自己教育がある許りで 教育の組織や制度も亦、 絶対の自己教育がなければなら 本質自己教

外形によって我々は自らの内的なるものに を表現しないものは無く、 いうもの 々裡の影響を加えるものである。 文化の形態は何れ一つとして我々の内的生活 組織や制度は単に外形だから何でもよいと もあろうが 人類の社会に現われる 他面には其の

計らなければならないのである。 て行って、 は、我々は自己教育の原理を徹底的に実現し 其れ故に教育の意義を完全に発輝する為に 結局は教育活動其れ自身の自律を

を造り、 個人を基準 れて行くことをいうのである。 到るところの現代の社会的モットーになっ あらゆる組織が個人としての自覚に始まり、 0 と並立した自律的範囲であり、随ってすべて ればならぬものである。「下より上へ」は 組織や制度の上に於ても其等から自律しな 教育活動は、 其の集団が漸次に抽象的に組織せら 礎として組合的に数人の機能的集団 他の経済的、 政治的等の活 我々は個人の た

念を生かすことだ。 律とは 此の二つは結局同じもの 我々の内なる全体性の 理

我々の社会は 個人の積層的集団を造って行 、全体性の理念に導かれつ、 か

る可きものでは無い 断じて天降り的の概念を上より注入せら ればならない

0 要求する。 其の創造を豊かならしめることが出来るよう により、反省の機会を得、創作の資料を持ち 社会を組織して個人が相互に影響し合うこと 生活創造は個人の孤立によって達せられず、 教育の意義は自己教育にあるが、併し我々 自己教育は又、 他よりの教育を必然的に

育者をも終生的に要求する 対しての被教育者なのである。其れ故に我々 何人も他への教育者であると同時に、 が終生の事業である事に随って、 他に 教

育の時期に就ては寧ろ其

れの逆を取る。

校にあるの日は終生的でなければならない。 する場所を学校と名付けるならば、我 其れでなければ個人は完成して行かないの 然るに現代の社会にあっては、 し教育者が成案的に、 秩序的に教育 々が学 学校

> には幾千の時間の余裕をも持たない。 的 って銷磨せられるだけであり、自己教育の為 みである。今日の銀行会社員などは其の標型 業生を見る眼は、 歳頃を以て終りとする。 なるものである。彼等は生涯其の機関にあ の相違も無い。 今や其れは銷磨せられるの 生産機械の製作を見る目と 社会が其の学校の卒

忘れない て居る。小学や中学やで学んだところのもの 習教育とか復習教育とか呼ばれるのを常とし である。何れにせよ、今日の教育概念に随え て終りを告げるものとせられて居る。 を実生活に近付ける役目をするとか、其れを だけで終った様に思い、其れ以後の教育は補 併し私は其の考えには全然反対であり、 小学や中学の教育にあっても、教育は其 学校教育はいか程長くとも三十歳頃を以 様に復習するとかに止まって居るの 教 th

生的のものだ。そして我々は一面社会にあっ 事す可きものなるが故に、 備教育たるに過ぎない。我々の学校教育は終 校教育であり、 今日の補習教育と呼ばれる時期が本当の学 すべて一人の例外も無く生産的労働に従 、学ぶ其れでなければならない 今日の学校教育は其れへの準 我々の学校は労働

> に於けるモットーである。 デモクラシイは、また今日のあらゆる社会 社会の生活だ。我々の学校は其処にある。 其れは最も理想的なる人

ラシイである。 の理念によって照らされることが真のデモク 外形の上に於て平等化せられる事では無い。 すべての人間の総ての活動が平等に全体性 すべての人間が平等化せられるとは、量と

である。 人の欲求を最高に満足させるのである。 各人が各人の能力を最高に発輝し、各人が各 即ち各人の個性が残り無く発輝せられるの 言換えれば、 真のデモクラシイ に於ては、

平等を達しなければならぬであろう。 其れの手段として一先ず機械的、外形的なるから、其れの得られない我々の社会の平等は めには、極めて多量の生活資料を必要とする 併し、 そうした意味の平等が達せられるた

於てのデモクラシイを要求しなけ 育にあるとすれば、我々は先づ第一に教育に る。我々の社会にあってデモクラシイの原理 適用せられなければならぬものは甚だ多い 普通選挙の要求の如きは、其 併し我々のあらゆる活動の基礎は自己教 れの適例であ ばなら

置かないでは、何の意味をも為さない。ラシイも、其の基礎に教養のデモクラシイをい。財産や政治発言権やの上に於てのデモク

居ない。 居ない。 居ない。

ての人間に開放せられては居ない。

我々は学校教育が大学を以て終る其れをさ
だが、其の大学までの教育さえ、平等にすべ
だが、其の大学までの教育さえ、平等にすべ

大学教育を受ける為めには、其の精神的能力以外に、莫大なる経済的資力が必要とせられる。其資力の無いものは此の教育を受けるにあっての地位も自ら高められることが出来でい。

がである。 結果の派生するところ止まることを知らない根本の原因として運命的に決定せられ、其の根本の原因として運命的に決定せられ、其のまでである。

ける機会を何人にも与えよと要求する。 其れ故に我々は、最も高い程度の教育を受

いとする。

精神であり、外形的の結果では無い。目とするところは、究極に於ては人格自律のより授与せられようとは望まない。我々の眼より授与せられようとは望まない。我々の眼

其れは終生的の学校である。
其れ故に我々は大学拡張教育という様な、い。我々自身によって組織せられ、支持せられる。我々自身によって組織せられ、支持せられる。

労働しつ、学ぶ学校である。
其の教育程度は最も高いとろこまで達する。
我々は特定の教育者を持つであろう。
併し所詮は、我々すべてが何等かの方面に
於て被教育者である事を自覚して居る。徒ら
於て被教育者である事を自覚して居る。
た就いて学ぶが我々の学校の本義では無い。
我々の学校は討論もすれば、談話もするで
我々の学校は討論もすれば、談話もするで

式を持つ。

めては居ない。

社会をつくる。

社会をつくる。

大はピラミッド形の一つの独立した教育組合の連盟を作る。下より上への連盟組織、其の組合は、前後左右に、積層的に教育組

此の全体の学校の理念を今より後、我々は

を我国に於て最初に実現した試みであったろ信濃自由大学は、恐らくは自由大学の理念「自由大学」と呼ぼう。

も支持せられず、自由大学自身の組成者を以も支持せられず、自由大学自身の組成者を以も支持せられず、自由大学自身の組成者を以

|箇年の試練に堪えた。 我々はあらゆる困難にも拘らず既に完全に

してよいであろうと思う。我々は此れを我国の教育家に一つの誇りと三週年の記念日が我々の前に達した。

由大学」の理念を追うて来た。由大学」の理念を追うて来た。

して行く。其の教育の程度も亦、大学の名を 我々の自由大学にあっては、すべての講義 根本的に組織を異らしめて来た。

のではないという事である。ところでは、組成者の教育への要求さえ強烈ところでは、組成者の教育への要求さえ強烈ところでは、組成者の教育への要求さえ強烈

「信濃自由大学の趣旨及内容」(大正十二年十月刊)